

16 噛み合せ治療の研究

平成十二年から十八年頃までのことです。私は、京都大学再生医科学研究所と東北大学大学院老年呼吸器内科の研究生をしていました。当時の私は、埼玉県にあるBBO研究会という噛み合せ治療を研究するグループに参加して、この噛み合せ治療の真偽を確かめるための研究をしていたからです。

この頃の私は、噛み合せ治療は万病を治すことのできる治療法であると認識していました。正しい噛み合わせを作り上げることによって、体のねじれを取ることができ、人体が本来持っている免疫機能や神経機能が正しく発揮され、そのことによってあらゆる病気を根源的に治癒することができる、いわば究極の治療法であると考えていたのです。

この治療法に興味を抱いた私は、BBO研究会に入会し、そこで癌や骨肉腫、

さらには糖尿病などの内科系疾患、あるいは腰痛などの運動機能障害などが、噛み合わせ治療によって治すことができるという症例を見せられました。研究グループの歯科医による報告であり、歯科医が嘘をつくはずがないとの思いから、すっかり信じてしまいました。

しかしながら、医学的に確立されていない民間療法でしかありませんでした。そこで、この治療の本質を大学で究明し、正式な治療法と認知されるように、私なりの試みを行っていたわけです。

京都大学再生医科学研究所の堤定美教授、東北大学医学部の佐々木英忠教授という、わが国医学界のトップクラスの教授のバックアップを得ることができ、この万病に効くと言われていた治療法の本質の解明に努めました。

その結果、分かったのは「噛み合わせを変えることで全身の状態の変化につながることは、ありえない」ということでした。病気が治ったとすれば、偶然

あるいはほかの要因によるものだというわけです。

私は噛み合わせ治療の論文を書くために、治療データを取っていました。ここで私が実感していたのは、噛み合わせ治療を行ってから数週間ぐらいの間は、それなりの治療効果を見出すことができるが、それ以降になると、ほとんどの場合、元の状態に戻ってしまうということでした。

こうしたことから、噛み合わせ治療は患者さんの期待がもたらした一種のプラセボ現象、すなわち、思い込みによって回復感が得られたに過ぎないと結論づけています。

17 理想的な噛み合せはない

私は、噛み合せ治療の効果は思い込みによる回復感に過ぎないと結論づけましたが、その後、それを裏づける報告がなされました。日本歯科医学会、日本補綴歯科学会、日本口腔外科学会など、わが国の主要六歯科学術団体からなる日本顎関節学会が、2013年に示した「顎関節症患者のためのガイドライン」です。

そこには「顎関節症は、大規模な疫学調査の結果、進行する疾患ではなく、時間の経過とともに症状が軽くなる疾患であることが明らかになっています」と明記されているのです。

顎関節症や噛み合せの不調は、とりわけ若い女性に多く発生しています。年齢的なピークがあるのです。このことから、私は一部の例外を除いて肩こりな

どと同様に、疾患ではなく違和感の類であり、それを感じるかどうかは、本人の性格やストレスなどの精神状態に左右されるものと確信するに至っていません。

ただし、以前から困った動きがあります。顎関節症の患者さんが全身的な不調を訴えてくるため、歯科医師が思い込みの理論に基づき、噛み合わせを変えることによって、治療しようとする流れがあるのです。患者さんの不安をあおり、今でも一部の歯科医院がこのような高額治療を施しているのは、憂うべき問題です。

顎関節症や噛み合せの不調は、一部には骨格異常が原因している場合があります。しかしながら、ほとんどの場合において、その人の精神状態の変化とともに改善していくのです。だからこそ、その人の精神状態が再び変化していけば、再発することもあり得るというわけです。

すなわち、ここでぜひはつきり認識していただきたいのは、顎関節症の多くは疾病ではなく、単なる身体の不調に分類される現象に過ぎないので、放置しておいたとしても、将来、何らかの全身疾患につながることはあり得ないということです。

噛み合せの不調についてもそうです。その人にとっての理想的な噛み合わせというものは存在しません。噛むという行為は、歯を上下に動かしてぶつけ合う事で食べ物を咀嚼し、胃での消化を経て、腸での栄養吸収にいたる流れの第一ステップの機能に過ぎません。つまり、食事をして飲み込むことができればそれでいいのです。

私の知人の有名国立大学病院顎関節診療部の歯科医師は、こう言っています。

「咬み合わせがあらゆる身体の不調を引き起こすという、過剰な咬合信奉者

が後を絶たない。結局は過剰な医療行為に誘導していくことになるのだ。そして、その尻拭いは大学病院だ」

これは歯科医師が嘯み合わせ治療で全ての病気が治るという考えに基づき、大がかりな治療を行ったにもかかわらず、結果が出ず、にっちもさっちも行かなくなると、結局は大学病院に患者紹介という形で救いを求めてくる。あるいは患者さん自身が大学病院に救いを求めて訪れる。大学病院では、こういった患者さんに対して、治療した歯科医師の立場を損なわないように配慮しつつ、嘯み合わせ治療への、過度な期待と間違った思い込みを取り除いて、患者さんが納得するように通常の治療を行う。すなわち、大学病院が尻拭いしていると、憂うべき歯科界の現状を物語っています。

嘯み合わせ治療で、全身の健康が達成できるといって、高額な治療費を提示する歯科医院にはご注意ください。